

# 「資料紹介」

図書資料部の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。その他の近着資料については『アジア経済資料月報』をご覧ください。

田中二郎 掛谷 誠編：ヒトの自然誌 東京 平凡社 1991年 622p.

本書は広い意味での生態人類学に関心を持つ27人の研究者の論文を集めている。また、本書はもともと昨年(1991年)3月に京都大学を定年退官された伊谷純一郎氏の業績を記念するものとして編まれたもので、執筆陣のほとんどは何らかの形で伊谷氏の影響を受けた研究者であり、この分野における氏の業績と貢献を改めて示すものとなっている。

掲載されている論文は、2編を除いて全てアフリカを対象にしているが、その内容は、生業・言語・病と死・社会変化など実に多岐にわたっている。これは伊谷門下の生態人類学が「自然内存在としてのヒトの諸相を描きあげる学問として展開してきた」(608ページ)ことの現われでもあろう。また、それぞれの論文の背後にあるものは、人間と自然、人間と人間、あるいは人間と超自然の「共存の原理」(8ページ)の探求という共通の問題意識である。この問題意識を個々の研究者が独自に発展させた結果として、生業と人間、コミュニケーションの諸相、生と死の宇宙観、人間同士の絆などの多様な研究方向が生まれている。

本書の中で特に目を引いたのは、伝統社会の変化を扱った第6章の4編の論文である。ここではニャキュサ(タンザニア)、バガ・ピグミー(コンゴ)、サン(ボツワナ)の社会変化の問題が、新技術の導入や移住・定住化の過程とともに論じられている。日本の人類学の分野では、開発政策の実施や市場経済化、あるいは国家の介入などに伴う社会変容の研究は比較的軽視されて

きた観があるだけに、この4論文の問題意識は今後の研究方向に示唆を与えるものとして注目したい。

本書に関してはその内容が多岐にわたるすぎて焦点が定まっていない、との批判も成り立ち得よう。しかし田中二郎氏が冒頭で書いているように、「今後の人類学研究の視点を、あるいは将来のアフリカ地域研究の問題点を、[個々の執筆者が]模索しながら筆をとっている」ことが本書の最大の特徴であり、評価できる点でもある。

(高根 務)

パトリック・メラン著 下田文字監訳：アフリカの日常生活 東京 新評論 1992年 316p.

本書は、ヨーロッパ諸国がアフリカを植民地として支配していた時代に生まれたアフリカ人やアフリカ社会、文化に関するヨーロッパ人の「誤った考え」を、アフリカ人作家の文芸作品を通して一掃するという意図のもとに書かれたものであり、アフリカの人びとの誕生から死後の世界観まで描かれている。

しかし、本書の意義はヨーロッパ人を対象としたメッセージにあると言うより、むしろ、明治維新に端を発する近代化の過程で、西洋文化をほとんど無批判に受容し、その結果として人間疎外をはじめ公害病の発生、あるいは家族生活や社会生活の崩壊といった問題に直面し、その対応に苦慮しているわれわれ日本人に対する人間的連帯のメッセージという点にある、と私には思われる。

なぜなら、本書には、植民地時代から今日にいたるまで西洋文化や物質文明の波に洗われ続けてきたにも

かかわらず、今なお、人間としての尊厳を堅持するために苦闘しているアフリカ人の姿が、伝統と近代という構図の中でみごとに描き出されているからである。

われわれ日本人の多くが日常生活に流されているうちにすでに考えることさえ放棄してしまっただけ「家族とは何か」、「社会とは何か」あるいは「人間とは何か」といった根源的な疑問を、本書の中のアフリカ人が日本の読者に投げかけている、と言ってもよい。

このように本書は、われわれにとって示唆に富む内容をそなえているが、そこに限界がないわけではない。それは、本書で使われている資料の多くがアフリカ作家の作品であるため、たとえば「なぜ無文字社会なのか」などというように自らの伝統文化に対する問いかけに欠けている点である。

(細見真也)

---

『アフリカの21世紀』 東京 勁草書房 第1巻 林晃史編：アフリカの歴史 1991年 245p./第2巻 日野舜也編：アフリカの文化と社会 1992年 254p./第3巻 小田英郎編：アフリカの政治と国際関係 1991年 370p.

---

本シリーズの『アフリカの21世紀』は、現代アフリカとその歴史的背景についてのバランスのとれた知識の提供を目的に編まれたものである。シリーズは3巻に分れており、第1巻は歴史を、第2巻は文化と社会を、第3巻は政治と国際関係を扱っている。どの巻もそれぞれの専門領域の第一線で活躍する研究者によって編集・執筆されており、アフリカの全体像をつかむための格好の知的案内役を務めてくれる。

第1巻の「アフリカの歴史」は、植民地化以降の時代を中心に扱っている。その内容は編者によるアフリカ史の概説のほか、キリスト教伝道と社会変化、アフリカ分割、植民地期の経済構造、ナショナリズム運動、南アフリカ問題などで、この時期の重要なテーマを各章で掘り下げて論じるという形式をとっている。

第2巻の「アフリカの文化と社会」では、豊かな現地経験をもつ文化人類学者たちが、自然と生業、超自然と儀礼、言語、女性、宗教、教育、市(いち)と交易、近代化と伝統的社会などの問題について論じてい

る。それぞれがミクロな調査の成果に基盤を置きつつ、アフリカ全体を視野に入れて議論を展開しており、バランスのとれた構成になっている。

第3巻の「アフリカの政治と国際関係」は、激動するアフリカ諸国の政治と国際関係の問題を論じている。取り上げられているテーマは、国家建設と政治体制、社会主義とナショナリズム、南部アフリカの人種主義問題、パックスアフリカーナとOAU、対アラブ関係、非同盟運動、新国際経済秩序、大国との関係、日本との関係、国際援助の現状など、実に多岐にわたっている。

本シリーズのように、アフリカに関する問題をそれぞれの分野の専門家が、バランスよくかつ単なる概説にとどまらない深さをもってまとめたものは他に類を見ない。ただ、当初予定されていたという「経済」の巻が最終的に日の目を見なかったのはいかにも残念であり、今後何らかの形でこの分野に関するものが出版されることを期待したい。

(高根 務)

---

R・サンドブルック著 小谷 暢訳：アフリカ経済危機の政治分析 東京 三嶺書房 1991年 238p.

---

世界銀行の報告書によると独立以来30年間のアフリカ経済は、1960年代の成長期、70年代の停滞期、80年代の経済危機の3期に分けられ、特に80年代経済危機の原因として、国際経済環境や自然災害よりもアフリカの内政的要因が重視されている。その要因の一つに国家の過度の経済介入をあげる。

本書の目的はこの問題に真正面から取り組み経済危機と国家機構(訳者はいまいさを避けるためStateに対して国家の代わりに国家機構という訳語を用いている)の関係をさまざまな角度と事例から論じることにあつた。

一般に後発工業国においては国家機構は市場関係に有利な枠組みを準備し、その経済発展を助長するが、アフリカの場合、国家機構は正統的権威を欠いた「私的支配」であることが多く、そのうえ国家機構は文化的に雑多な小農民社会を統括していかなければなら

いというジレンマが存在する。この結果、行政機能は破綻し、外貨不足、累積債務の増大に陥り、経済は「維揉み降下」に陥る。

このような状況から生き残る戦略として著者は、三つの処方箋を提示する。(1)「国家機構を相手にしない」草の根レベルの自助努力とそれに対する先進国の援助、(2)「市場の解放」のための国家機構の介入の縮小、(3)「国家機構の育成」として国家機構内の人材の育成である。

本書は今日アフリカに広く起こりつつある民主化の動き以前の1985年に出版されたにもかかわらず、現在、アフリカが直面している経済危機と国家機構の関係の本質をみごとにえぐり出しており、その分析の帰結として生まれた処方箋も決してその有効性を失っていない。その意味できわめて優れたアフリカ政治経済分析といえる。翻訳も十分こなれている。著者はカナダのトロント大学政治経済学部教授。

(林 晃史)

パトリック・マーンハム著 柴田都志子訳：深く、アフリカへ 東京 心交社 1991年 306p.

本書には「アフリカ人」といわゆる「北側の価値観」との葛藤が辛辣な風刺と鋭い洞察に満ちた文章で描かれている。そのためもあったのか、原書 *Fantastic Invasion: dispatches from Africa* は7回の出版拒否にあったのち1979年アメリカで、翌年にはイギリスで、やっと刊行にこぎつけたと著者は序文で述べている。

紀行作家であった著者は1976年にサヘル地域を取材のために訪れて以来、たびたびアフリカに足を運ぶことになる。その旅行で得た印象と北側の報道から受けるイメージとのギャップに関心を持ったことが本書執筆の動機になっている。

たとえば、北側ではアフリカの選挙戦を予測するときすぐに政党を持ち出すが、著者の考えでは、そうしているかぎり確実な予測は不可能で、部族を基本にして論じれば「選挙結果の予測がためられる」などと言わずにすむというわけである。にもかかわらず、北側では『タイムズ』紙がアフリカの部族地図を掲載するだけでも学界や外交界から抗議が殺到するのが通例

であるという。

取り上げられた話題は多岐にわたる。人間と野生動物が元来共存していた地域に「自然保護区域」が出現したことによって、保護区で働く人々の生活を成り立たせるには象を絶滅の危機にさらし続ける必要があるというジレンマが生じてしまったこと。また、多くの国では都市の境界が国家体制の行き届く実質的な国境なので地図上の境界線は何の意味も持っていないこと。このような主題を著者はアフリカ各地での体験を有機的に結び付けながら述べている。社会派の紀行文でもいえようか。

風刺に富む文章を翻訳することの難しさから訳文は若干読み進みにくくなってはいるが、アフリカをよく知る人にはより深く内容が理解できるし、初心者にとってもアフリカの抱える問題が直感できる書であろう。

(鈴木陽子)

勝俣 誠著 現代アフリカ入門 東京 岩波書店  
1991年 v. 225, 4p. (岩波新書)

アフリカ諸国への援助について、従来よりさまざまなことがいわれてきた。「援助疲れ」、「援助は腐敗した政治家に渡り、効果がない」、「農産物の生産が伸びない」、「援助を投入すれば伸びるはずだと考え、なぜ伸びないのか検討しない」等々。

アフリカの年と言われた1960年に始まる独立以後のアフリカ諸国の「北」の国々との関係は「援助」と「開発」という言葉で括ることができるだろう。大量の資金が多国間援助や二国間援助で供与されてきた。しかしこの間に1人当たりGDPがこれらの援助にもかかわらず減少した国さえある。異常気象にもとづく旱魃、繰り返されるクーデター、内乱といったできごとがアフリカ人を疲弊させ、経済を停滞させる。空からドルを蒔く方がよほど援助になるという話が出る。本書は著者がアフリカと係わってきたこの20年間の豊富な現地経験をもとに一般の読者層を対象に執筆されたものである。独立期から始め、民主化の流れ、その間の困難な政治状況、対外関係、開発・援助問題といったことを色々な面から描いている。限られたページの中にア

フリカの抱える多種、多様な問題を盛り込むための努力は大変なことだったろう。

本書を通読して感じることは、著者が「同時代」に生きる人間として「北」や「南」の視点を取らず同じ人間として描こうとしていることである。このことは「あとがき」の中で、「日本はヨーロッパと異なりアフリカを植民地支配したことがないので、手が汚れていず、アフリカ人にとって親しみやすい」という考え方を鋭く批判している点によく出ている。南アフリカの経済制裁に対する日本の消極的な対応をみると、アフリカ人にとって日本が親しみやすいとはとても思えない。日本人はどうなのか、私自身は同時代に生きる日本人としてアフリカとどう付き合っていくのかを考えさせられる。

(井村 進)

聖心女子大学キリスト教文化研究所編：アフリカとの対話 東京 春秋社 1990年 380p. (宗教文明叢書 2)

「アフリカとの対話」というタイトルどおり、この本は聖心女子大学キリスト教文化研究所が主催した共同研究「アフリカ文明論」の例会とシンポジウムにおける報告(1986～88年)をまとめたものである。類似テーマ別に、「第1章 アフリカの魂」(辻邦生、五十嵐一、阿部年晴)、「第2章 アフリカの社会とコスモロジー」(川田順造、小川了、田村愛理、佐藤潔人)、「第3章 聖書と古代アフリカ」(秀村欣二、木間瀬精三、森村信子)、「第4章 現代アフリカの課題と展望」(堀江浩一郎、米山俊直、吉澤五郎、土屋哲)の構成である。話題は多岐にわたっているが、とくに第4章は現代の日本人に直接かかわりのあるテーマである。限られた長さの中で、堀江氏の「アパルトヘイトの形成史」は読みごたえのある論文である。米山氏の「アフリカ文明と日本文明」では日本のエスニックな同一性がアフリカ人の今後の統一に参考になるのではないかと示唆があるが、これは重要な問題であるだけに、議論をもう少し展開させてほしかった気がする。

(丹莖靖子)

松園万亀雄著：グシイーケニア農民のくらしと倫理 東京 弘文堂 1991年 183p.

本書は、ケニア西部の農耕民、グシイーの人々についてのエスノグラフィー(民族誌)である。本文の構成は、

- I グシイーとはどんな民族か
- II 二十世紀はじめのグシイー高原
- III 衣装の歴史
- IV 性・排泄・裸体
- V 恥と尊敬
- VI 割礼——十二月の大祭
- VII 妖術と死霊

となっており、文化的特色に加え、歴史、自然環境、国家との関わりなどがいきいきと描写されている。

なかでも入念に描かれているのは、グシイーの人間関係を規定する「恥と尊敬」の観念である。「社会的距離」「冗談関係」等々、専門外の読者には取っつきにくい用語で説明されがちなことがらも、ここではグシイーの村々で暮らした著者の経験に即して、わかりやすくまた読み物としても面白く語られていく。

また、グシイーとは何か、どんな歴史を持っているのかについて説明した導入のI、II節も明解で、はじめから読者を本の世界に引き込んでしまう。臨場感あふれる歴史の描写は、祖父から建国の思い出話を聞いているかのような、少し厳粛で、だがわくわくするような気持ちを引き起こす。

ロングショットで撮ったグシイーの全景から始まって、画面は徐々にグシイーの人々へと寄っていく。映画の常套手段でいくなら、終わりにもう一度ロングショットの鳥瞰図で大団円とするところであろうが、本書は妖術信仰にクローズアップしたところで緊張したまま幕となる。「ページ計算をして捨ててしまった下書きのほうに気持ちが残る」という著者にとってグシイーの物語はまだ始めたばかりで、とてもまとめるどころでなかったのかもしれない。残された部分のそれぞれはまた「べつ長い物語りになる」そうだから、読者としては続編を楽しみに待ちたいと思う。

(津田みわ)